

阿育王史傳(Asoka's History)其他梵語文書に傳ふる傳説を叙述詳論せしものなり、更に之を漢傳の阿育王經・阿育王傳に比較すれば、更に興味あるべしと信ず。

(堀 謙 徳)

中央亞細亞にけるモハメット

教徒の靈拜

アウレル・スタイン述

Note on Biddhist Local Worship in Muhammadan Central Asia. By Aurel Stein. (Journal of The Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. July, 1910.)

予の中央亞細亞探檢に就いて述べ可きこと頗る多し。嘗て第一次の探檢に於いて、新疆省于闐地方に

行はるゝ、モハメット教徒の信仰の古習に就いて叙したる所ありしが、尙同地方の考古學上の方面に就いても精確に報導し得るものなきに非ず。古代西域に往復せし支那の僧侶殊に唐の玄奘三藏の如き人々が其の往復の徑路に残せる遺物遺跡は、十分に之を證する資料となるものなり。然れども當時佛僧が記念す可き地點として後人に記し残せるものは、多くはモハメット教の堂宇に聯關する物語 又は其の教徒自身の口碑傳説となりて傳へられつゝあるは特に注意すべきことならん。(拙稿 Ancient Khotan, vol. I, Index) (V. P. 611. 參照せよ)

更に今地質の方面より于闐地方を觀察するに、その地殼は一帶に巖石を含有せず。従つて建築彫刻用として石材を得るに由なく、堂宇の構造、總べて木材、粘土或は煉瓦などの如き耐久の性質に乏しきものを以つてするの止むなき故ありと云ふべし。されば同地方の古代建築物が原形を失はずして今に残ることの難きは察するに餘あり。(Ancient Khotan) 之に反

して、カシュミール(Kashmir)地方に於ける予の探檢に於ては、考古學的研究資料を堂宇の材料に得たる所少からず。蓋しもと此はモハメット教徒が、ヒンヅ(Hindu)の佛堂より得たる石材を以つて構造せしもの多さに由る。于闐カシュミールに就いては、大略此くの如し。然れとも西紀一九〇六年より同八年に至る予の探檢は、その地域を更に擴大せしかば、從つて考古學的宗教資料も亦多く得る所ありたり。左に其の要を録せん。

支那西域交通史上の大立物なる玄奘は、西紀六四二年パミール(Pamir)の高原を経て、東北ガシユガル(Kashgar)及び于闐に出でたり。先づ路を今のサリコル(Sarkol)なるChieh-p'an-toの町より路を東北にとり、人跡なき高嶺幽谷の間を行くこと二日、支那里程二百里、茲に所謂Punya salaなる避難所あり。嶺の峠に當つて位置す。玄奘は此の靈境に尙宗教的本地の存するを察し、その中心を葱嶺の東部高原地とな

せり。然るに此の幽境は夏尙凜烈の寒風雪と共に猛り狂ひて止む間もなき程の別天地。識らず支那印度間の要路に當れるととて駱駝の隊商は必ず此の天險を冒さざるを得ず。されば玄奘の記録を俟つ迄もなく、此の天險吹雪の犠牲となれる人畜の數は、毎歲幾何なるを知らず。サリコルの人士は罹災者隊商の遺物珍品を拾ひ集めて之を藏し、以つて隊商旅行者の恩惠を永く記念せんとに勉む、(Julien memoires des Con-
三參trées occidentaux, II, P. 2)。而して上述の峠の避難所は玄奘の徑路の方向及び行程より察するに、サリコルの都タシユクルガン(Tashkurgan)カシユガル間の街道が、ムヅクジャタ(Muzkuzhata)山彙の第二南脈と相交錯せる所にあるチチクリツタ(Chitlik Itk)山の傍に位せるものならんと思惟せられたり。然るに其の推測は予の今次の探檢によりて、全く明確にすることを得たり。即ちその峠は一帶の谷地中に存ず。谷地は長さ二哩半幅一哩半。彼の四時雪を戴きて海拔一萬四千尺以上

を有するシンシ(Sindi)谷と相接す。予等の親しく實際する所を以てするも、猛威逞しき吹雪の絶えまなき此のチチクリックの山間には、年々人畜の凍死、餓死、横死を見ること敢て異とするに足らざるなり。

(Sir Henry Yule's 'Cathay and the way thither' p. 562)

西紀一九〇六年夏六月、此の境に達せし時は、全山尙白雪を戴き居たりしも、一小地のありて雪なく塚塋の跡かとも思しきものを發見せり。モハメット教徒のものなるべしとて、就いて觀るに、約三十五呎方形の磐石が、さも勿體らしく頑丈なる石壁を以て蔽はれたるものなり。様式は古代のものに相違なかる可く、壁面に劃せる線の悉く東方を指せるは、モハメット教渡來以前のものたるべく、同伴のサリコル人の報告によるに、今尙モハメット教徒の間にて、神聖視せられつつあるものなりと云ふ。

チチクリック地方の地殻は岩石に富み、地表凸凹多く、従つて峠の避難所となれる地點も自ら恰好の倉

庫狀を形成せるに似たり。玄葬の記する所亦之に一致す。洞穴、壁巖は自然に崩壞して、幾何の年代を経しか固よりさだかならざるも、考古學、地質學上よりする時は、恐らく玄葬の記録に見ゆる古き結構の片見として之を窺ふを得べしが如し。總じて支那土耳其斯坦地方にては、陵墓の傍には堂宇を建設し、古聖賢の靈を祀る。尙墓地境域の神聖を保たんが爲め、周圍に外構を繞らすの風あり。玄葬も當時此の避難所の石洞を以て古聖の開きしものとなせるに似たり。幽境に行はるゝ口碑傳説中、其の宗教に關するものには、頗る奇異なるものあり。嘗つて一九〇八年明治四十一年の春五月、天山の南側アクス(Aksu)よりウチツルファン(Uch-Turpan)に向つて探檢しつゝありし時、一行の得たる一口碑を左に摘録せんに、ウチツルファンの南嶺の絶頂に一城址あり、廢頽して樓閣奇形を呈す。天氣朗かなる時は、髣髴としてその輪廓を指點することを得。然れども一旦之を追求

して到達せんとすれば、常に忽ち影の如くに消去すと云ふ。此の架空的口碑は其の後ケルベン(Kelpin)の幽谷にてシャルイバルバル(Shahr-i-Bardar)又はシャルイハイダル(Shahr-i-Haidar)(Tung城物語)の名にて其の士民間に傳へられつゝあることを知れり。城廓は自然の神が天鑿を以て創造せしかと疑はるゝ計り天山山脈の空に高く聳え、日光を受けて、神々しくも反射せるを見たり。予が先きにカラタケ(Kara-Take)の名にて中央亞細亞地圖に記入しおきたる嶺は即ちこれなり。海拔一四〇〇〇尺、カラシムチ(Kara-Shilwe)の傍糸中に聳ゆ。

天溪の空に聳ゆる架空の幻影はキルギス人の間にては、カカジャード(Kaka-Jade)の總名にて尊び呼ばれ、城壁内には千古の神龍棲み老い、時々火熾と電雪とを吐き荒ぶと傳へらる。バミール及びヒンドクーンシト(Hindu Kush)の谷間に住めるナガ族(Naga)の傳説亦頗る之に似たるものあり。傳説の研究上異

味ある問題なるべし。

五月十三日、名にし負ふ架空の城壁を探検すべくキルギス人マングシ(Mangush)を一行中に加へ、サギスカン(Saghis-Kan)の峠を立ちて分け行くこと十七哩。先きに城壁地と見たる地點チャルコイデ(Chalkoid)の峯に達せり。カラジャデの町の東端より右方にあたり、海拔七千尺。之に堂宇あり、方形なり。周圍の岩壁を以つて自然の外構となし、屋上に塊岩内に石像あり。像は丈三尺、首大に、手小、曲剣を佩びたるさまなど粗笨なる凸刻にて示されたり。その石質の餘りに崩壊せると、彫刻の餘りに粗なることにより、其の年代を肯定しがたきは固より、その像の意味が如何なる點にあるかも全く不明のことに屬す。されどその臨下にあたる所の花崗岩の面に印度塔即ちスツーパー(Supa)の横型を刻めるあり。而して其の様式は明に中央亞細亞に於ける此の種の遺物に通有なる特徴を示せり。依つて考ふるに、此の

石像は正しく佛教傳來當時のものなるが如し、石像に就いては大略此くの如し。次に掲ぐ可きは堂宇に捧げられたる犠牲の遺物なり。構内馬骨、されかうべ、野羊の角、襪褌の束等堆さ迄に奉納されたり。普通モハメッド教聖堂に供ふる代に一致す。固より士民は游牧を事とするものなれば、アラビアに起りしモハメッド教がその生活に適するものと見え、その禮拜祈願の極めて現世的なるは理の然らしむるところ。ウチ、ツルファン（Murrah）之を來世のものとみ勉むるも、その効果を收めがたしと云ふ。而して此の堂宇禮拜の習風は幽境キルギス人の間に一般に存じ、峯を超え谷を渡りて參詣するもの引きも切らず、トルキスタンの善男善女のモハメッド教徒となるもの多さを加ふるに至れり。されど最近には古老の間にのみ此の風を存じ、それすら構内に到來して祈願するもの殆んどあらずと云ふ。前記室内の石像に就き其の由來するところを、その傳説によ

りて徴するに、もとは古英雄カズアテ（Kasate）の配偶者クワギズ（Kwaghiz）を女神に見たてたるもの。而してその古英雄は人跡の及ぶ能はざる元山の絶頂に鎮座し、モハメッド教の信者に非ざれば、誰人とも之を認め拜すること能はざるものとすなり。モハメッド教聖堂に關する此の異習は、その起源を何處に有するか。思ふに、こはもと佛教の思想に淵源し、梵語の偈歌に存ずるは自然教所謂スヴァヤンブ、チルタ（Svayambhu Tirtha）の禮拜に關係を有するものなるべし。

以上チトラル（Chitral）の堂宇に關する説話によりて、吾人は凡そ信仰的畏敬の念はたとひ先入宗教の絶えて數百年の星霜を経、又信徒は全く改宗するとも尙堂宇の力によりて、信仰の形式を保持し得ることの如何に容易なるかを察知す。實にヒンドクシミユ分水嶺以前の溪谷は、今日政治上にては印度に屬するも、人種關係、文化の特色は、正しくオクサス

河(Oxus)の上流域と密接なる關係を有するに似たり。

一九〇六年五月ヤールクン(Yarkun)河を流れて沿ひて湖り、ワカン(Wakhan)の谷及びバミールの連山の方向に進む。ムリコ(Muriko)谷なるチャルン(Charrun)の山里に達するや一大磐石に刻銘のあるものを發見せり。就いて調査するに、西曆六世紀乃至八世紀當時のブラーミ(Brahmi)文字を以つて印度語を書きたる下に單簡なる銘と佛寺塔とが刻されて、いと鮮明なり。土人の語る所によれば、こは既に八年前その附近の土中より偶然に發掘せられたるもの、爾來土民は神聖視して、偉力の神と呼び齋き祀り、小祠を構へて之を保存す。傳へ云ふ此の界限はもと神の天降りし處にて、その一旦姿をかくし給ひてより、磐石そのかたみとして現れ、殊に之に刻文の存するものの發見につれて、神聖視せらるゝに至りしものなりと。

ムリコ(Murikos)の幽境に於ける傳説は、大略以上如し。此の傳説は予の探檢以前に於いて既に久しく存在せしものなりや否やは、固より確保しがたし。されどその地質は沖積層に屬して、既に久しく土民の耕作に適せるもの、而して舊來の印度佛教の信念を忘却して、既に此の三百年以來はモハメッド教を信仰するの徒とはなれり。されば今日傳道教師が古代佛教の餘習を之に追求せんと欲するならば、必ずや失望すべく、かくて此の幽境は唯佛教に就いては、單に考古學の研究資料を得るのみに止まるべし。

(後藤朝太郎)

滿洲獻文小論

グレベンシッチコフ述